

平成29年(第11回)みどりの学術賞選考委員会  
委員長コメント

平成29年(第11回)みどりの学術賞受賞者の選考にあたり、選考委員会は、「みどり」に関する学術研究に造詣の深い全国の学識経験者約400名の方々に対し、受賞に相応しい候補者の推薦を依頼しました。

その結果、約40名の候補者の推薦が得られ、多様かつ大変幅広い研究分野から、受賞に相応しい研究者のお名前を挙げていただきました。

選考委員会は、推薦のあった方々の業績を慎重に調査・審議し、都市緑地計画分野と光合成研究分野で活躍されているお二人の方が受賞に相応しいとの結論にいたりました。

受賞者のお一方は、都市緑地計画の分野で、都市の公園緑地から冷涼な空気が市街地に浸透する「にじみだし現象」の存在や、市街地周辺部から都市部に向かって風が発生することを実証的に明らかにし、ヒートアイランド現象緩和のための緑地の効果的な配置手法としての「風の道」を提唱され、都市における熱環境の緩和と低炭素まちづくりに資する緑地政策の展開に大きく貢献された、千葉大学名誉教授の丸田頼一博士です。

もうお一方は、光合成研究の分野で、植物の葉緑体の中で光合成を通じて酸素が発生する際に触媒の役割を果たす「光化学系Ⅱ」というタンパク質複合体について、原始的な光合成生物から高解像度で解析可能な結晶をつくり出し、これまで明らかにならなかった原子レベルでの構造を明らかにした功績により、今後の太陽光エネルギーの人工利用の実現に向けた研究の進展に大きく貢献された、岡山大学教授の沈建仁博士です。

受賞者お二人の研究の分野は大きく異なりますが、学術的な観点から極めて優れた業績であるとともに、いずれも我々人類と「みどり」との関わりについて深く追求され、「みどり」を活かして暮らしていく未来を示された研究として高く評価いたしました。

選考委員会を代表し、両博士の永年に渡るご研鑽に対し、心より敬意を表するとともに、このような「みどり」に関する学術が新たな知をもたらし、社会を動かす源泉になることを期待し、念願するものであります。

平成29年3月21日

みどりの学術賞選考委員会委員長  
石川幹子